

ふじさん

fujijoho group monthly magazine

富士情報

～ 2019年指針 ～
Chance Challenge
Change with Vision.

[社長・年頭所感]

Chance Challenge Change with Vision.

・役員・年頭メッセージ



降雪の朝

写真提供：忍野村 観光産業課

[年頭所感]

Chance Challenge Change with Vision.

取締役社長 渡 辺 直 企

明けましておめでとうございます。

2018年から2019年にかけて国際情勢や経済指標が大きく動き、経済環境的には潮目を迎えたように見られます。この流れが我々の生活に影響してくるには少し時間がかかると思います。経済環境は不透明ですが、IoT、人工知能、ロボットなど仕事を取り巻く環境は日々進歩が進み、生産性や品質の向上、そして人の仕事を代替し始めています。このような環境の中、変わらず従来どおり頑張っているというだけでは、相対的に衰退していることになってしまいます。これらの新しい技術を使いこなすか、新しい技術でも容易に侵食できないレベルに向かうか、どちらかが必要になります。

野村総合研究所によると、「芸術・歴史学・考古学、哲学・神学など抽象的な概念を整理・創出するための知識が要求される職業」や「他者との協調や、他者の理解、説得、ネゴシエーション、サービス志向性が求められる職業」は、人工知能やロボットで置き換えるのが難しい職業になるそうです。一方で、「特別な知識やスキルを必要としない職業」および「データ分析で体系化可能な職業」は、今後人工知能やロボットで置き換えられる可能性があるとのこと。

当社も「究極の情報サービス」を掲げお客様のノウハウや暗黙知をサービスとして実現できるよう進めて来ました。今後も一層理念の実現に向けて進んでいきたいと考えています。

2018年は各部門とも数年に一度と言えるような大きな選択や行動をスタートしました。2019年は

この動きを、より本格的に軌道に乗せて実態を伴った変革を実現していきたいと考えています。この動きの中で漫然と頑張る、変えていこう、というだけでは結果を出していくのは困難です。そこで今年の指針を「Chance Challenge Change with Vision.」とさせて頂きました。検索してみると「Chance Challenge Change」というフレーズは結構使われていて、「チャンスを見つけて、積極的にチャレンジして変えていこう!」といった意味合いで使われています。今年の指針はこれに「with Vision.」をつけることで、常に理念を意識したうえでChance Challenge Changeを実践していくこととなります。

Chance というと偶然訪れる機会、好機などのニュアンスが強く Chance 自体は、目の前に偶然やってくるものと考えがちです。指針の Chance とは偶然の機会というよりも、鍛錬そのものであり、自分自身にとっての課題の発見ということになります。つまり、Vision と現時点の自分との違いを認識し、少しでも Vision に近づくための課題を見つけることが Chance となります。Vision を意識し続けることで困難な課題に Challenge し続けることが可能になり、長い間困難な課題 (Chance) に Challenge し続けることで大きく変わる (Change) ことが初めて可能になります。

「究極の鍛錬」という本の中で究極の鍛錬の特徴として「あまり面白くない」「精神的に苦痛」などがあります。これらの鍛錬をフィードバックを得ながら継続的に徐々に段階を上げていくことで、その道のプロフェッショナルになれると言

われています。これが俗にいう「一万時間の法則」であり継続することが非常に重要です。

元ニューヨークヤンキースの松井秀喜選手が星稜高校時代に野球部の山下監督からおくられた心理学者ウィリアム・ジェイムズの言葉で「態度が変われば習慣が変わる。習慣が変われば人格が変わる。人格が変われば運命が変わる。」という言葉があります。これは人生というより大きな視点

での取り組み方を説いた言葉です。今年の指針は仕事、技術の向上に対する目標ですが、考え方としては非常に近いと思います。

実力さえつければ偶然やってくる **Chance** も確実に自分の手中に収めることが可能になります。皆さんの「**Chance Challenge Change with Vision.**」を結集し、会社を大きく変えていきたいと考えています。

キャッシュレス社会

専務取締役 小坂 志郎

昨年10月にデンマーク、ノルウェーに行きました。現地で一番驚いたのはキャッシュレスが進んでいることです。スーパーでの食料品の購入も、コンビニでの飲料の購入も、現地の人はほとんどがクレジットカード決済でした。帰国して調べてみると、我が国のキャッシュレス決済比率は2割程度で、ドイツと共に先進国（同比率4割～9割）の中では珍しい現金主義の国なのです。私自身も典型的な現金主義で、通勤で使用するPASMO以外はクレジットカードすら利用するのは月1回程度です。諸外国では生産性向上（レジ対応短縮化等）や犯罪対策（脱税、現金強奪等）としてもキャッシュレス化を進めてきたようです。

日本でも外国人観光客への対応や人手不足への対応のためにキャッシュレスは浸透しつつあります。ただし、中小企業にとっては決済端末やネットワークのコスト、決済手数料、決済までのリードタイム等の課題が大きく、キャッシュレス化は浸透しにくいのが実情です。さらに、すでに多数流通している電子マネー（交通系、流通系等）の利用可能範囲が限定的（互換性が無い）であることもキャッシュレス化の浸透を阻んでいます。逆に言えば、これらの課題が解決すれば日本でもキ

ャッシュレス社会が現実のものになる可能性があります。

日本のキャッシュレス社会の旗振り役は経済産業省です。昨年4月に策定した「キャッシュレス・ビジョン」では2025年に向けてキャッシュレス決済比率40%を、将来的には世界最高水準である80%を目指し、環境整備を進めるとしています。キャッシュレス化推進のカギとなりそうなのがスマートフォンとQRコードによる決済です。この分野もソフトバンク、NTTドコモ、LINE等々が参入し、競争を繰り広げています。昨年7月に設立された「キャッシュレス推進協議会」でQRコード決済の標準化が実現すれば、近い将来、初期投資や決済手数料が少額で災害時にも利用可能なキャッシュレスが実現する可能性があります。年末には今年10月に予定されている消費税増税に備え、政府がキャッシュレス決済時にポイントを還元する制度の検討を開始し、LINEがみずほ新銀行を設立する、といった話題も出てきました。もしかすると1年後には私も飲食時の支払いの際にスマートフォンを取り出すようになっているかもしれません。

TPOを構築する

常務取締役 千野 顕 司

2019年の年初に当たり、普段から気になっている「TPO」について少し考えてみたいと思います。この言葉はIVYスタイルの創始的役割を担った「VAN」の石津謙介氏が発案した和製英語だそうです。「Time（時間）、Place（場所）、Occasion（場合）に応じた服装・態度等を使い分ける」という意味でよく「TPOをわかまえる」という文脈で使用されます。この言葉はマナーや振る舞い的には当然正しいのですが「既に与えられたTPOという場」を前提として表現されています。その意味では現時点の諸々の環境とシステム事業本部が置かれている場からするともう少し違った文脈で再解釈しても良いのではないかと普段から感じていた次第です。

Time（時間）について言えば、一つ目は時間は一律密度で通り過ぎる訳ではないという事。二つ目は時流に乗るという言葉は不透明性が強い現在ではそう簡単でないという事。三つ目は積み重ねの時間のパワーを知るという事だと考えています。

Place（場所）について言えば、一つ目はその場所はどのような立場・要素で構成されているか知るという事。二つ目はそこまででどのような順番によ

りその場所が生まれたか考える事。三つ目は態度として自らの組織力を活用し、信じて臨むという事だと実感する事が多いです。

Occasion（場合・場面）について言えば、一つ目はいきなりラッキーな場面が降ってくる訳ではないという事。二つ目はその場の全ての関連者に事情や流れや意図があるという事。三つ目は場を作る要素は自分達自身でもあるという意欲を持ちつつ実行し積み上げていくという事が重要だと思っています。

こう解釈するとTPOはもはや所与の前提条件という視点だけではなく、各自の様々な立場を組み合わせながら組織として実力を蓄積しつつ、自らが**Vision**を持ち「構築」し、持続していくべきものという能動的な要素の方が強くあるべきではと考えています。少し抽象度が高い表現もありますが、どこか思い当たる所があればもう一度自分なりの各自のTPOの「構築」を考えてみて頂ければと思います。

そんな視点で更に実力をつけ発揮し、今年の会社全体の指針にシステム事業本部も大いに貢献していきましょう。

改革の年に

取締役 平 井 博 人

昨年9月に大阪から東京に異動になり、11月に取締役に拝命いたしました。

昨年は、自分自身にとっても激動の年でありましたが、世の中も大阪府北部地震、台風21号、北海道胆振東部地震と自然災害が立て続けに発生

したり、年末には株価暴落と人的および経済的に不幸な出来事やマイナス要因が続きました。そんな中、大阪万博の決定は光明となるニュースでした。大阪に愛着のある小職としては少しでも大阪の、ひいては日本の景気が上向く起爆剤となっ

てくれればと期待を寄せております。

今年は、平成から新しい年号に変わります。入力帳票でも年号区分の変更や、これまでに年のみの入力であった項目に年号を付加して入力する等大幅な変更への対応が発生いたします。

「働き方改革を推進するための関係法律の整備に関する法律」の施行もあり、ただがむしやりに働けばいいのではなく、働き方を意識した自分自身の事務処理能力や生産性の向上も目指さなければなりません。

エントリー部門としての大きなトピックスとし

ては、2月に4課の端末をパソコン端末に入れ替えを行います。ディスプレイが、大きくなり液晶になることで視認性の向上、眼精疲労軽減とPCキーボード使用者の人材確保を目指します。

混迷する時代ですが、私たちのなすべきことは常に変わらずお客様のニーズをくみ取り、ご要望に対し臨機応変にできる限り対応していくことが肝要かと思えます。

私生活でも仕事面でも、目標を立てて充実した日々を1日でも多く過ごせるよう頑張りましょう。

“思い”を強く

丸久・常務取締役 宮下啓三

丸久は昨年度、創業40周年の節目の年を迎えました。長年多くの良きお客様に恵まれ、また社員の力強い協力のもと一歩、一段ずつ業績を伸ばしてきました。おかげさまで損保ジャパン日本興亜MVP賞（全国優秀代理店表彰制度）も連続して獲得することができました。全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

さて本年度は更に業績を伸ばし、長年の目標である一般種目（自動車、火災、新種、自賠責）で2億円を突破する年です。社員全員がその“思い”を強く持ち、果敢に挑戦していきます。チャンス

は前髪を掴めと言われますが、いつ訪れるかわかりません。挑戦する思いが強ければ強いほど、機会が多ければ多いほどチャンスは巡ってくるはずです。いつもお客様への最上のサービスの在り方を考え、ベストプランを提案し続けて安心を届け、尚一層お客様に信頼され、愛される代理店に変わっていくことが重要です。

平成最後の年となる本年度は新しい時代への幕開けの年でもあります。もう一度原点に戻って挑戦する思いを強く持ち充実感が味わえる1年にしていきたいと思います。

今月の表紙

～冬の朝焼け～

今年の表紙は忍野村観光産業課のご協力により忍野村の四季折々の風景などを掲載します。

忍野村は美しい自然に囲まれ、村内には天然記念物で世界遺産構成資産の「忍野八海」をはじめ、富士山の撮影スポットがたくさあり、毎年開催されるフォトコンテストには全国から作品が集まります。

富士山の写真家として著名な岡田紅葉（1895年生

まれ）は1916年に忍野村からの富士に出会い、たびたび忍野村を訪れて富士山の撮影にその生涯をささげました。撮影した写真はこれまでに切手や紙幣にも採用されました。忍野村には岡田紅葉写真美術館があり、千円札のデザインの元となった「湖畔の春」などの代表作をはじめ、常設展として約50点の写真作品や紅葉のこれまでの軌跡を知ることのできる資料等が展示されています。

丸久通信



「MVP」取得に向けて！

「MVP」の取得に向けて3月31日まで残り少なくなってまいりました。今年も丸久全員で新規のお客様取得に取り組んでおります。損害保険各種（自動車・火災保険等）だけでなく、生命保険の取り扱いもごさいます。些細なご相談から承りますので、お気軽にお声がけください。

丸 久

電話：0555-24-2341 メール：marukyu@ag.sjnk.co.jp



私の趣味
No.472

53歳からのフルマラソン

藤 田 豊

今から4年前、私がマラソンを始めるキッカケとなる運命的な出会いがありました。金哲彦著「50歳からのフルマラソン」。本屋で何気なくこの1冊の本を手にとると「50歳からでもフルマラソンは誰でも完走できる」と記されていました。折しもマラソンブームに火が付き始めた頃で、流行ものに弱い私は単純に納得し、一瞬にしてその気になってしまったのです。

とは言うものの、当時の私は運動不足と大量のアルコールにより体重82キロの完全なメタボリアン。とても40kmも走る状態ではありませんでした。

しかし、どうせ走るなら東京マラソンを目標にとエントリーしてみたところ、なんと10倍以上の倍率にもかかわらず、意外にも当選してしまったのです。

さあ大変だ。さっそく5か月でフルマラソンを完走できる練習プランを作成し、本格的にトレーニングを開始。負傷を負いながらも走り込みを継続し、大会直前の平成27年1月には月間200kmを走破しました。

そして、臨んだ東京マラソン当日。新宿の東京都庁前をスタートし、銀座の賑わいやスカイツリーといった大都会の景色を満喫しつつ、大会をサポートする1万人のボランティアとコースいっぱい途切れることのない声援に感動しながら、颯爽と42.195kmを駆け抜けました。うれしい！楽しい！気持ちいい！4時間51分完走。53歳のオヤジの初マラソンとしては満足できる結果でした。

それ以来3年続けて東京マラソンに当選する幸運に恵まれ、昨年にはサブフォー達成。今では年間8大会程度出場するなど、走ることが私の人生の大切な一部になっています。

昨年の暮れには、マラソンに無縁だった妻をハワイ旅行を餌に連れ出し、二人してホノルルマラソンに出場しました。

午前5時、暗闇にもものすごい数の花火が打ち上げられるなか、3万人を超えるランナーとともにスタート。何とも感動的でした。生憎30km過ぎに妻が膝を痛めてしまい、ゴールまで歩くことになりましたが、2人で25年間の思い出を語り合う、とても貴重な時間を過ごすことができました。

なんで走るのかとよく聞かれます。答えはありません。辛く大変な思いをしてゴールしたにもかかわらず、すぐにまた次の大会のことを考えています。何故でしょうかねえ？

いよいよシーズンインです。富士北麓の素晴らしい自然の中、皆さんも走りだしてみませんか？

(山梨中央銀行 取締役 吉田支店長)

